

## 審査員特別賞 「私と漆器」

私は漆器に全く興味が無かった。とは言っても家の食器が全部洋食器である上、おせち料理を食べる習慣もないのでお重すらあまり見たことがなかった。すなわち興味がなかったというよりは見たり触れたりする機会が無かったのだ。

そんな生活をしていき十五年、中学三年生になり学校行事の班別研修でのテーマが漆と漆器になった。日本刀や京野菜などいくつか候補があった中で、他の班と被っていなかった漆をそれとなくと言っては失礼だが選んだ。しかし、各自で個人テーマを学習しているときに驚いた。漆器は奥が深く不思議と知れば知るほど引き込まれた。

そして研修当日、石川さんに工房でお話を伺っていた際に漆を塗る時の行程を表した一枚の板を見せていただき加えて石川さんはこうおっしゃった。

「こんなに工程を重ねなくていい。でもお客さんを騙したくないから正直に塗るんだ。」と。

私は利益よりもお客さんを重んじて作業するだという職人さんのひたむきで純粋な心得に感動した。心のこもった情熱あふれる職人さんの心こそが漆器なのだとも思った。そして石川さんはさらに絵を付けてある漆器を見せて下さった。黒地に金色の柳の木が描いてある美しいお重箱だった。まるで自分が柳の木をその場で見ているような躍動感と引き込まれそうなほどの奥行きを一目で感じられるくらい臨場感あふれる作品であった。これを見て漆器をテーマに選んでよかったと強く思った。

漆器をせっかく学んだのにただの「研修テーマ」にしておくのはもったいないので、まずは家族へ漆器の魅力を発信して、お金をためて両親にプレゼントしてあげたい。

漆器が私の家族とのつながりにいつかなって欲しい。